NO、41（通算２１５）

絵・文・題字

渋谷　一夫

地形から見た南畑

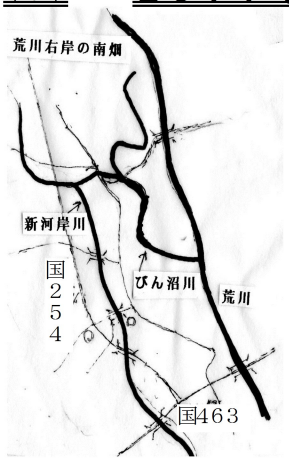
ご存じの通り、南畑は新河岸川と荒川に挟まれた低湿地だ。縄文時代は東京湾がここまで入り込み海だった。その後、海は退き陸地化したが、やはり低湿地だ。

水は、高い所から低い所に流れる。これが自然の理だ。大雨があると、水は一気に流れ下る。あちこちに溝や堀ができ、それが合流して大きな川となる。新河岸川然り、荒川然りだ。

また、豪雨による大量の水は、土を削って運び去り、流れの緩やかな場所で堆積する。「水の三作用」だ。そして川は蛇行しさらに深くなる。これも自然の理だ。堆積した場所は盛り上がり自然堤防もできる。

堤防上は人が住めるようになる。その後背地は田畑となる。こうして南畑はできたと想像する。だから低湿地だ。それ故稲作には恵まれている。だが悩みもあった。川の蛇行だ。たびたび洪水を引き起こした。

そこで、先人たちは大決断を下し、過去２回大改修を行った。



蛇行を舟運に利用

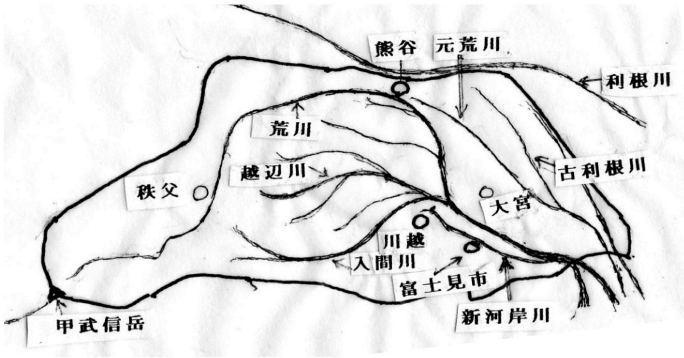
まず新河岸川。新河岸川は、川越の伊佐沼に端を発していたという。

１回目の改修は17世紀中頃。川越に大火があり仙波の東照宮が焼失した。再建のため大量の資材運搬が必要になった。

当時の川越藩主松平伊豆守信綱は新河岸川の利用を考えた。もともと蛇行していた川をさらに大きく蛇行させ、流れを緩やかにし、水量を豊かに保ち運航しやすくした。九十九曲りだ。舟運の始まりである。後、流域にたくさんの河岸を設け、川越江戸間の重要な交通路とした。

富士見市にも、当時６つの河岸ができ、大変恩恵を被ったようだ。

２回目の改修は、大正の中頃。蛇行していた川を真っすぐにし、堤防も高くした。現在の新河岸川の原形だ。これで洪水の心配も大分薄らいだ。



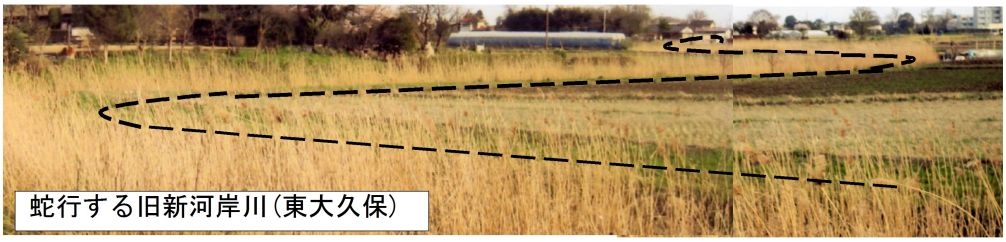
びん沼川は入間川系

びん沼川は、もともとは入間川だった。それが、新河岸川と同じ17世紀の中頃、大改修が行われた。

当時の荒川は、熊谷・蓮田・岩槻方面を経て東京湾に注いでいた。今の元荒川だ。それが、第１回の大改修で、流れを入間川に移し替えられ荒川本流となった。おかげで流量は増え、びん沼川や下流域は洪水が頻発した。

そこで、２回目の大改修が大正中期に実施された。流路はかなり真っすぐになり、幅も広くなり堤防も高くなった。現在の荒川の原形だ。

いずれにしても、南畑は両川に挟まれた低湿地だ。いつ、何が起こるか分からない。心して安全安心を心掛けたい。


蛇行する旧新河岸川（東大久保）